



六
花

7

2020

りっかはいくかい

山田六甲

織 姫

紳七

はまぐりを拝みにゆかん舩ひ解け

大垣水門川

舩はれて水門川の梅雨に入る

町中なつかの隠し城なり夏落葉

青葉して城のまはりの廓街まち

本丸に出水の跡と刻みあり

桑名では刻を忘れて貝合はそ

あぢさゐに閑所やぶりの通り雨

不破の閑

裏伊吹五月雨てゐる不破の閑

梅雨雲の笠かぶりけり裏伊吹

漢神生き返りたる清水かな

日本武尊

生簀あり醒ヶ井餅の店先に

藻の花に醒ヶ井餅を買ひにけり

芭蕉書簡の餅

手を入れて目は醒ヶ井の清水かな

城下にあぢさゐ御膳いただきぬ

福知山城

城垣の裏へまはれや夏薊

龍天に昇りし後や福知山

織姫と昇龍橋を上りけり

五月雨に濡れむと傘を忘れ来し

雪嶺抄 花のこゑ 笹村 政子

竹林の明るくなりし初音かな
野遊びや柵を越ゆるはひと仕事
たんぽぽや空地に鳩と鳩の影
陰りてはまた日の差せり蝌蚪の水
鴉の巢母のつぶての届かざる
打ちつけに母の声きく朧かな
椿落ちて地の明るきを眩しめり
海峡の波のけぶらふ菜種梅雨
花冷や小さき古墳に日の差せり
耳元に散りくる花のこゑ聞かむ

蟋蟀抄 土 筆 志方 章子

ぺんぺん草鳴らし淋しさつのりけり
あの頃は幸せなりし土筆つむ
手足生ふお玉杓子や洗面器
抽出しを片づけてをり花の雨
思ひ出の一つもあらず桜貝
離れたる風船空を出てゆきし
味噌汁に母の好みしちさ匂ふ
風船を目で追ふ赤子身を反らす
訳有りのたつた一人の花見かな
春日傘に顔を隠して行き違ふ

ぬばたまの 升田ヤス子

はまなす抄

孫へアードネイション
ぬばたまの髪を寄付して卒業す
春ストーブ黒豆珈琲ブラックで
鳥帰る刈り込み鋏使ふ空
新粉餅大きく鄙の雛祭
子離れのところに雛を流しけり
谷の日を返して麦の青みけり
花三分半ば開けある庫裡の門
湧き水に片寄せられて花筏
厄介な男のこころ養花天
誰もぬぬ浜の砂浴ぶ雀の子

藤生不二男

山桜 山稜抄

去りたるも逝きたるもみな山桜
美作の空との曇る花辛夷
一枝のまづ揺れそめし桜かな
廃屋のゆたかに濡るる木の芽かな
わが影の水田に伸びる夕雲雀
田起しのねぢれし土の黒光る
残りたる鴨の一羽の浮きしづむ
鳥影のとどまりかねつ花の雲
海棠のときをりこぼす雨しづく
さざ波の水辺ゆたかに鳥の恋

善野 行

鼬

藍那抄

下萌に出てうつくしき鼬かな
かげろふのゆふべのみちのひとりかな
おぼしまに菜の花風のかよひけり
ひきかへし匂董の風と知る
西塔に釈迦の生涯春の闇
風鐸のかすかに揺るる春の雲
揚雲雀遙かに追へば御蓋山
佐保姫のいますや遠き朱雀門

住田千代子

くるぶし

野遊抄

蹠つに触れてすがしやヒヤシンス
種物の袋を洩るる黒きこ糸
始まりは探険ごつこ土筆摘む
霾ぐもり亀が顔出す池の縁
もちの木の幹が幹抱く春の闇
囀りや仏足石の罅ひびにも
部戸の黒晴れやかに御開帳
ウイルスに校舎は静か花万朶

永田万年青

妙音抄

出口 誠

箕面抄

黒竹に囲まる東司花万朶
卒業式入学式の無かりかな
養花天うかぬ顔して乗る電車
咲誇る無人の中の八重桜
花冷えやうどんに卵落とし込む
花は葉になつてをりけり驚きぬ
気がつかば春満月の大きかり
晩春や出会ひし人の俯きぬ

休みたる学園に咲く桜かな
だれも居ぬ校庭に咲く桜かな
足もとに赤白ピンク芝桜
春の宵苦しき口にできぬまま
花びらを雨に落として八重桜
すずなりのピンクのボール八重桜
公園に歓声戻る春の午後
一日のマスクを外す春の宵

谷口一献

大仏は半眼^めで桃色月愛でる
鳥鳴きて虚子の忌日と教えらる
春惜しむ紅茶に落すブランデー

コロナ禍五句

養老抄

天眼鏡で探すコロナ禍暮の春
自宅待機腑抜けの顔で夏に入る
上階の音気になりし薄暑かな
堪えかねることの多かり夏兆す

田尻 勝子

中庭に石白転げ花の冷
鎖樋春天より落つ涙かな
花満月神と照りたる疫の街
竹の子は神の産着を着てをりぬ
ペロリンとETCや若葉光
瀬を越える鯉の水音や春の川
鶯や煙立ちたる山の精
泉水のひさご形なり蝌蚪黒き

肥後抄

平居滯子

山をみな抄

廣畑育子

光明抄

万愚節玩具の猫に経読ます
地に着いて支離滅裂に藪椿
マスクせる埴輪ぞろぞろ春の闇
二上の眉はやさしく春の月
訪ふ人の絶えて牡丹の彩の濃し
おりてくる闇寄せつけず白牡丹

裏門の隅をいろどり花あけび
黄鶴鴿柱状節理横切れり
確かめる若い茅花の穂の甘し
蟻の道我も外出自肅中
偲ぶ人増ゆるばかりや春朧
ぼんぼりに灯らぬ明かり花筏

延川笙子

躑躅抄

延川五十昭

三囲抄

五分咲の今こそよかり八重桜

ひね松の根元に赤きつつじ咲く

家持を和ませせしやかたかごの花

水音に唱和してをり百千鳥

鳥声に揺らぐ楓の若みどり

水を差す筍飯を炊きをれば

麦秋や一千年の大櫨

椎の葉に筍飯を盛つてあり

枝曲る大樹の根方に山躑躅

印南野の水琴窟や藪椿

さらさらと印南川の花菖蒲

折り盗む翁に山吹散りにけり

江見 巖

ロボットと話しのできる万愚節

仏生会天井川の流れくる

旅立に起こされたるや蜆汁

糸桜婆の出てくる曲がり角

雪彦の一面著莪のなだれ咲き

組み替えしたる遺伝子や花筏

相生抄

大内幸子

笑ふ山背に工場の安全旗

七色の洗車の飛沫烏雲に

野良仕事止めるつもりが茄子植ゑて

気がかりとコロナに更けて四月尽

買物も早々戻るコロナ風邪

窓硝子マスクハンカチ干しにけり

作用抄

二上の眉はやさしく春の月

平居 澪子

山の端のほのかなさまを眉墨に、また、美しい眉を山の稜線に見立てていう。「遠山の眉」などとも言い、遠山のようにほんのりと青い眉。また、うっすらと引いた黛。美人の眉や黛をたとえていうさまで二上とは奈良の二上山。いかにも春の月に相応しい形容で古典的な響きのする句。いよいよ澪子俳句の実力発揮。

六花集



菊谷 潔

花の雲心もとなき日和かな

花の雲ひとつのまるに暮れにけり

花びらの虚空にとまる月夜かな

雨一夜花の散りたる空のあと

麦の波雲より高きひばりかな

磯野青之里

印南野や芽生えるものに春日影

ムスカリや声なき声を突き上げむ

コロナ禍や春潮の渦奥深く

花冷えやパンデミックに引き籠る

川に散る花絶えずして水速し

蛍雪譚

令和二年7月投句より



江見 巖

ロボットと話しのできる万愚節

万愚節とは四月一日の四月馬鹿のこと。こういう時代が早く来ないかと待っている。今どこに電話をしてもわからないことはメールかホームページで質問してくださいという。パソコンやスマホのことが分からない老人にはお手上げだ。電話したらロボットが親切に対応してくれるのがいい。最近早く払えと督促のハガキがくるが何の請求か分からない。電話番号を書いてないから、どこへかけたらよいのかそれすらわからない。何とかしてくれ。

大内 幸子
笑ふ山背に工場の安全旗

幸子の家から工場が見えるのだから。以前にも工場を詠んだ句がある。日常目にする、耳にすることを句に詠みこむのは、力があることである。掲句は工場に立っている春の安全週間の旗が翻っている。それは背後の山が笑うのと呼応して今日も安全に、という呼びかけの句。俳句としては面白い捉え方。夢風撰候補。

菊 谷 潔

麦の波雲より高きひばりかな

雲より高いというのが佳い。雲雀が鳴き揚がつて、雲を突き抜けるような気がするが、実際にも雲の上まで突き抜けているのかもしれない。昔は麦畑の空に揚がった雲雀をすぐに見つけられたが、今は焦点が合わないから、見つけられない。その目で見上げるとたしかに雲の上で鳴いているように思えるのだ。夢風撰候補。

石川 憲二
学び舎に光溢るる楠若葉

母校の楠大樹が芽を出し若葉になった。その光は昔の気持ちと同じで光があふれるように輝いている。「青葉あふるる加古川の流れも清き大空に伸びよ大志を抱きつつ石川憲二の心意気」と校歌を歌ったその昔を偲んでいるのである

武井 博子
はんなりと桜の精の気配して

桜の精に気づいたのは鋭い。山には山の精がいて、その山の精は桜に棲みついている。梶井基次郎は小説で桜の樹の下には死体が埋まっていると書いた。はんなりとは上品で落ち着きがあり、明るさ、華やかさ、陽気さも併せ持つさまを表す言葉のことで京都を中心に関西で使われる言葉。夢風撰候補。先月号で武井さんの句「ゆく春の涙一筋父逝けり」を夢風撰としていたが「候補」が抜けていたので申し訳なかつた。